

ハンブルグのムジークハレ ソコロフのコンサート

松尾 治樹



2007年のリサイタルプログラムより

株式会社 松尾楽器商会

パイプ・オルガン製作者のゴットフリート・ジルバーマンの名前は兄のアンドレアス・ジルバーマンやアルプ・シュニッツガーと並んで、バイオリンのストラディバリやグワルネリに匹敵する偉大な名前なのだが、ピアノの製造の歴史に於いても決して忘れることのできない重要な名前なのだ。ピアノは、1700年頃にメディチ家の楽器職人バルトロメオ・クリストフォリによって発明されたのだが、彼自身の制作した楽器は現存しているものは3台だが、そのいずれも1720年代に入ってからのもので、そのうちの一台はライプツィヒの楽器博物館に展示されていて実際に私も観たことがある。しかし、クリストフォリのピアノフォルテのことは、後年1711年に、イタリア人のシュピオーネ・マッフエイによってベネチアの新聞に図面入りでその論文が掲載される迄殆ど忘れられていた。

ドレスデンの近郊エアフルトに工房を構えていたゴットフリート・ジルバーマンはこの論文のドイツ語訳で、初めてクリストフォリのクラヴィチェンバリ・コル・ピアノ・エ・フォルテ（強弱の出せるクラヴィ・チェンバロ）のを知り、その卓越したアイデアに触発されて、その図面を元に、実際にピアノフォルテを造ってみた。そして、更に自分なりの改良を施した。それがフルートの名手で啓蒙大君主として名高いプロイセンのフリードリッヒ大王の目に留まり、ヨハン・セバスティアン・バッハの次男で、フリードリッヒ大王の音楽指南役だったカール・フィリップ・エマヌエル・バッハにそれを見せた。たまたまその時彼に子供が生まれ、孫の顔を見たさに遠路遙々やって来た大バッハにその楽器を見せた。いろいろな楽器に精通していた大バッハだったが、高音

部が貧弱で、鍵盤も重く弾き難いと、最初はまったく相手にされなかった。彼の批判に一度は腹を立てたジルバーマンだったが、思い直して彼の助言を入れ改良を重ねて行った。そして遂には、大バツハにも気に入られる様な楽器になった。漸くその様にしてピアノフォルテは楽器として日の目を見ることになったのだが、ジルバーマンが亡くなると、彼の甥のハインリッヒと13人の弟子達は挙ってロンドンに渡り、其処で産業革命の洗礼を受けることになる。

同じ頃、ルイ16世の庇護を受けていて、後に現在のグランドピアノのアクションの原形となるダブル・エスケープメント方式のアクションを発明することになるセバスティアン・エラールもまた革命の為にパリに居られなくなってロンドンに渡るのである。ピアノ産業はその後ロンドンを中心にして著しい発展を遂げ、遂に花を咲かせることになる訳で、ピアノはまさしく啓蒙主義の申し子なのだ。

もう10年ほども前の春のことだが、急に家内が休暇を取って何処かに行こうと言い出した。ヨーロッパのイースターの休暇が終わり、日本のゴールデンウィークが始まる狭間のその時期は飛行機も比較的空いている。連休中は何処に行っても人が一杯で行くならチャンスなのだが、さて何処へ行こう？ 誰にも邪魔されずに暢んびりと出来れば行き先は何処でも良かった。結局、我々が選んだ先はドイツのハンブルグだった。2005年のハンブルグ・スタインウェイ社の創立125周年のお祝いの時以来になるのだが、その時から私には是非訪ねてみたい楽器博物館があった。個人が所有する小

小さな博物館なのだが、その時は予定がいろいろと詰まっていた結局行きそびれてしまった所だった。其処を訪れる以外には特に目的も無かった。インターネットで嘗て泊まったことのある小さなホテルを予約して置いた。それは35年前に私が最初にハンブルグを訪れた時に泊まったアルスター湖畔のこぢんまりとしたホテルだった。ハンブルグに到着したその日の朝に少々雨に降られただけで、その後はずっと天候にも恵まれた。夜明けから夜遅くまで小鳥の囀る声が響いてとても気持ちが和んだ。ゴットフリート・ジルバーマンが制作した楽器が展示されていると云う肝心のその楽器博物館は生憎その時期は閉まっていた。残念だがまた次の機会と云うことになった。



Laeiszhalle Hamburg © Thies Rätzke

ホテルで貰った簡単な地図を頼りに、あちこちと散策していたらムジークハレ（2005年にライスハレに改称）の脇に

2007年4月24日リサイタルプログラム

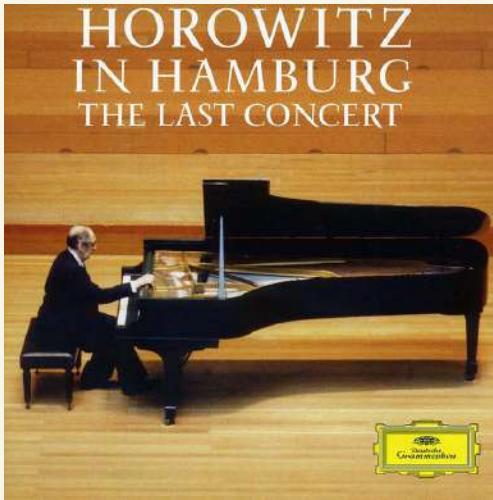
その日のプログラムは、前半がシューベルトのハ短調のソナタD.958、後半がオール・スクリャービンで、「左手の為のプレリュードとノクターン」Op.9、「ソナタ第3番」嬰へ短調、「ポエム」Op69の第1、第2番、続いて「ソナタ第10番」ハ長調Op.70、そして最後が「焰に向かって」Op.72と云うものだった。スクリャービンとなると、どうしてもホロヴィッツの演奏が頭に浮かんで来てしまいそれと較べてしまう。スクリャービンばかりが並ぶと聴く方も少し大変だ。前半のシューベルトは文句無しに良かった。このシューベルトを聴けただけでもハンブルグまでやって来た甲斐は十分にあった。



ソコロフはハンブルグには毎年定期的に来ている様だが、飛行機がまったくダメの様で、日本に来ないのもそれが理由なのかもしれない。

2005年にハンブルグ・スタインウェイ社の125周年の記念のコンサートで弾いたデートレフ・クラウスのブラームスも

素晴らしかった。そして、更にその25年前になる1980年の創立100周年の記念のコンサートではウィルヘルム・ケンプを聴いた。その時は客席がいつまでも騒々しくてなかなか静まらないことにケンプが腹を立てて演奏の前に長々と聴衆に向かってお説教をしたことを思い出した。あの時は父と母が一緒だった。



ホロヴィッツを聴いたのもこのホールだった。1986年5月のモスクワ公演の後のリサイタル、それと、87年6月のリサイタルもこのホールで聴いた。87年の時は、ベルリンの市政750年記念行事の一環としてベルリンのフィルハモニーホール

に続いて6月21日に同じ記念財団の主催で行われたリサイタルだった。それが結局彼の公での最後のコンサートになってしまったのだが、その時彼はとても元気でまだまだ弾く気十分だった。

演奏が終わって楽屋に彼を訪ねると、彼は私を指差しているものに戯けて見せた。「日本に是非また来てくださいね。次は何時来てくれますか？」と私が訊くと、彼は間髪を入れずに、「もう日本は十分だよ。ニューヨークの聴衆は素

晴らしい。ベルリンの聴衆も素晴らしい。アムステルダムも、ハンブルグも素晴らしい。でもトウキョウはネエ……」
そう言って彼は口を噤んでしまった。私と彼のそれが最後の会話になってしまった。ベルリンに1年程住んだ経験のある私には、彼の言いたいことの意味が良く解った。彼の様なタイプの演奏家には、日本の聴衆はお行儀が良いと云うか、おとなし過ぎると言うのか、演奏中に客席から伝わってくる『気』の様なものが何か違うのだ。

① ザルトツブルグ リサイタル 2008



② ワルシャワ ザルトツブルグ ライブ

